

今秋期闘争の地平を踏まえ、全人民的政 治闘争の回路を「大衆的権力闘 争」として獲得せよ！

共産主義者同盟中央常任委員会

われわれ革命派にとって今七四年は、七〇年代中期の権力闘争のために、決定的に重要な年であった。なぜなら、十一・八破防法結成集会、十一・一七・一八フォード来日訪韓阻止闘争は、第二次共産主義者同盟の解体一分裂以降、混迷を重ねた全戦線に対し、革命的潮流の存在を明示し、新らたなる全人民の結集軸とその闘いの方向を指示示すものとして存在したからである。諸党派のなだれを打った第二インター化の中にあって、革命的潮流として形成する第一歩をわれわれは踏み出したのだ。この一步は、おそらく、日本階級闘争にとって決定的な一步となるであろう。

〔一〕

フォードの来日訪「韓」は、ベトナム撤兵―米中接近を契機とした米帝の世界戦略の修正―転換をはかるものとして存在した。それは、石油危機以降の全世界的不況のりきりのための全世界人民の収奪を目指した日米の調整であり、具体的には「韓国」の民衆をその範囲におき、「韓国」そのものの運命を決定することを目指して行なわれたのである。だからこの会談の本質は、「韓国」―日本人民に対する収奪の強化を運命づけるものとして存在したのであり、それは、巷間にいわれているように、核問題の調整や反共軍事同盟の強化一般が問題であったのではなく、現在、進行している権力支配の強化をより促進するものとしてあつたということがまず確認しておかねばならない。

七三年の中東戦争を契機としたイスラエル―アラブ産油国の和解は、アラブ民族資本の革命派圧殺の上に行なわれ、したがつてその結果としての「石油危機」は、革命派の敗北と米帝の勝利を政治的には意味してはいる。だが、このことを契機として資本主義は、全世界的なインフレの高進と長期的不況にみまわれた。そして、こうした全世界的なインフレと不況に対し日本帝国主義をはじめとする諸列強は、内外における帝国主義の社会再編を强行することもって応える他がない。したがつて、「韓国」をはじめとする日帝侵略下の後進国支配の強化と国内における権力の再編は、今やその歴史的(被支配―支配)本質的性格の差異は存在するとしても、日本帝国主義にとっては同質なものとして、同時に進行しようとしている。したがつて、われわれは、「刑法改悪」による破防法の常態化を

単なる国内反動一般として、アジアにおける諸闘争と切り離してとらえてはならないし、また、具体的に進行している日帝の国内再編一スクラップアンドビルドや、地域再編とも分離してこれを考へることは許されないのである。より具体的にいえば、日帝の侵略によるアジア諸国との矛盾は「反日反政府闘争」を各地で呼び起している。「韓国」においてそれは「反日反朴」闘争として鮮明に表現されている。日帝にとって「韓国」の闘争の弾圧と「韓国」における「安定」をはかることは、アジア反革命体制確立の試金石であり、タイ、インドネシア等々のアジア全域の反日帝闘争の高揚を抑圧する要石となっている。また、日本国内においては、日帝は「總需要抑制」という名目で、長期不況下においても金融引き締めを行なうことにより、中小企業を国内においてはスクラップし、国外に輸出してビルトするという露骨な対外侵略型の再編を強行しようとしている(センイや軽工業、「ヤシカ」をみよ)。こうした再編はイデオロギー的には「福祉国家幻想」と「受益者負担」の押しつけて行なわれているが、中小資本の大資本への従属と倒産を運命づけており、自然発生的な労働者、地域住民の闘争が個々的ではあるが拡大しつつある。

このように情勢の基調をブルジョア階級とプロレタリアートの対決という観点でとらえるならば、われわれは、総評「民同の如く、經濟闘争と政治闘争とを分離して考えることができないのはもちろんのこと、六〇年代型のバターンで政府危機→政治危機へと大衆運動の自然成長性に身をゆだねることはできない。そのような方法では、今や、大衆運動さえ組織できないといわざるを得ない。なぜな

游撃

3号

月二回発行
1974・12・15

定価 80円

共産主義者同盟
連絡先 東京都世田谷区千歳郵便局
振替東京〇一九五七八三

らば、このような再編が進行しつつあることを大衆はすでに感覚的には知つておらず、この再編に闘い得るのは強力な権力主体だけだと。いうことは六〇年代の階級闘争がすでに証明しているからに他ならない。現在問われているのはプロレタリアの権力機関形成に向けた七〇年代を真の権力闘争の時代とする陣型構築を地域的政治結合による闘争体連合形成的端緒として闘うことである。

74春闘で明らかなるように「弱者救済」の名のもとで民同は、大企業労働者と官公労働者を中心とする既存の組織原理と闘争姿勢によつて未組織労働者、中小企業労働者を組織しようとして体制安定化に手を借りる役割を演じたが、一方、この過程を通じて総評型労働組合主義へ反発を開始した労働者の「政治性」は、既存の議会政党によつては代行しえないものになつていて、労働者は、労働＝生産の場と消費生活（社会生活）の間の距離が拡大し、労働の即時的要求を軸とする組織化（＝労組）によつては、労働者の生活全体を貫くことは、困難になるようなところまで帝国主義社会再編は、行政権力の肥大化、自治体行政の合理化をともなつて地区的にも強化されている。

このような現状においては、階層としての即目的利害一般に依拠した運動ではなく、旧来の運動枠を突破した部分の地区政治結合を軸として大衆運動形成へと、「春闘構造」に代表される運動総体を解体止揚するものとして準備され、そのような労働者人民の政治成熟をかけて政治闘争を闘かわなければならない。労働者の地区の政治結合を実体として保障し推進していくものとして労働者政治同盟を核とした地区的政治団体を媒介とした地区闘争体連合が要求されているし、われわれは、そのことの内実をもつて11・8破防法、11・17・18闘争を闘い抜いた。これこそ70年代中期への階級闘争の第一歩であるとわれわれは明確にとらえねばならない。

〔二〕

だが新左翼の内部には、「交通ゼネスト」による擬制の戦闘性と青年部運動の高揚の期待に挙げ、左翼反対派としてしか既成の民同指導部との分岐を形成しえない諸君が登場した。このことは民同一代々木（10・19集会）への追従に結果し、市民団体との一日共闘が大衆運動であるとの錯覚さえ生み出している。それは展型的に17日の宮下公園での集会において表われた。

17日1時より都労活、神奈川労活を中心とした実行委員会の主催によって神宮通り公園において四百名の結集をもつて集会が開催された。9月全労交集会において主要に論争された「交流から運動へ」を物質化させようとするものであつたが、その内実は、政治課題へのとり組みがないという批判に対応したというレベルにとどまつた。現段階における政治課題の取り組みを街頭カンパニアのみにかけすることは、権力闘争の陣型構築へ向けた組織戦術として不充分である。「フォード来日訪韓」阻止闘争を、日帝の権力再編を情勢分析による暴露一般に闘争を限定することではなく、集会実行委の形成に向けての政治的意志一致の内実が問われており、主要には都労活、神奈川労活等が今秋期闘争を索引する闘争主体へと自己を確立する方法の明確化こそ必要であったのだ。

つまり職場闘争を軸とした労働者の政治的自立とその登場は、労働組合形成が労組間共闘を越えて「解雇共闘」としてなされようとしており、ここにわれわれは新しい戦線構築の萌芽を見いだすことができるし、それを前述の方向性でもつて組織化することが問われていた。この新しい労働者階級内部の動きを、プロレタリアートの政治的表現として高め、全階級を領導する主体へと転化させることが

問われていたのである。だが17日の労働者集会の意味するものは、「労働者だけの集会」「労働者の政治表現」にのみ自己を限定し、労働者である限り、本来は「階級性」「革命性」を内包しているはずであり、またそのような労働者の結合体である「労働組合」も本来的に「階級性」を持つはずであるという、69年秋の反戦青年委の切り拓いた地平からさえ後退し、「組合主義」の新らたな装いの中にそうした革命的な萌芽を溶解させる傾向を発生させた。これは、労働者の政治的指導性に対する軽視そのものであるといわざるを得ない。問題の本質は常に、労働者の政治性をいかなる運動において表現し切るかにかかっている。

ところが、そのような視点を没却して闘われた1時の集会は、3時からの宮下公園での『南朝鮮人民連帯』、フォード来日訪「韓」阻止闘争』集会へひきつがれ、この集会を担つた主体的勢力の民主主義擁護」「世なおし」のヘルでの幅広い統一戦線へと自己の党派性を溶解させることを結果させ、「党派間統一戦線」によって大衆を領導する」路線、八派共闘路線の右翼版を現出させた。第4インターの諸君の「三里塚9／16東峰十字路被告団」に対する右からの攻撃（9／16の革命性の压殺）は、彼らがもはや69年秋期闘争の地平から後退し、「小ブル急進主義批判」をすることによって自己を市民の第三列へと売り渡そうということを証明している。また参院選以降の「三里塚闘争に連帶する会」の総括基軸のないままの固定化は、市民団体との幅広い統一戦線のための機関への横すべりであり、第4インターの第2インター化（社民・日共への屈服）の大衆版以外のなにものでもない。

問題は不況の長期化とインフレの進行の中につれて、帝国主義社会再編の持つ種々相と、そこにおける矛盾の発現が、市民的秩序の中にとりかこまれるかにみえながら、さまざま自然発生的な闘いとして人民各層の自立的な反帝国主義的な運動として存在しており、それに注目しそれらを総体として帝国主義権力を擊つ構造へと組織していくことにあるのだ。われわれの闘いの戦略配置を国家権力と全面的に向むしめる戦闘構造こそが問題なのである。故にもたれあいの統一戦線におけるカンパニアとして運動を表現しようとすることは、運動の波及、深化を保障するものでないし逆に反帝潮流を後退させるものでしかない。また自民党内部の権力抗争をよりどころとして「政府危機」から「政治危機」をアシリ二段階戦略そのものともいえる「田中内閣打倒」のスローガンを提起し、日帝打倒による国際主義問題を何一つ語ることのできない17日の集会はわれわれにとって批判の対象でしかない。これでは具体的に社民反対派を越える提起をなし切れるわけがなく、たかだか70年代権力闘争を旧来の「戦略、戦術」に規定された大衆運動で置きかえることでしかないう。われわれはそうした諸党派の後退をはつきりみすえておかなければならぬ。

〔三〕

われわれは、「労働者主義」や「学生主義」という階層主義をのり越えて、74労働者運動実行委員会と2・6実行委員会がその共闘を実現し、羽田現地における正午からの『フォード来日訪「韓」阻止闘争』と、6時からの『フォード田中会談阻止闘争』を連続闘争として闘い抜いたことを評価する。現在の階級戦線の特徴として、前述したように人民各層の利害をかけた闘いが自立的に展開されることをあげることができるがこれらの闘いは、他の階層の運動との連関の中でのみ強力な運動へと転化することをわれわれは知つてゐる。三里塚闘争は農民の生活破壊反対という即目的利害を契機に

遊 擊

出発した闘いでありながら、「労農学との共闘」を既存の「政治」を打破しつつ形成したのにひきかえ、「階層としての運動」へと自己を純化し共闘を拒否して、敗北していった「むつ小川原」の闘いとの差異をみればそれは明白である。個々の闘いを社会関係総体の中で位置付けることの重要性をこの事実はものがたっている。

ところで反戦＝全共闘運動の崩壊、いかにかえれば68～69年にかけての政治的敗北以降、労働者、学生問わずその闘いは、街頭を中心とする形態から、職場－学園における闘いへとある意味では後退を強いられ、ある意味では深化していった。これは帝国主義の支配が末端にまで及び、労働者にとつてもまた学生にとつても生活過程総体を巻きこんだものとして闘わざるを得なくなつたことの反映であり、またそれは、「市民」（個的・存在）として街頭で「労学」が共闘する戦線秩序崩壊過程における統一戦線の解体を表明していくといつたといつてよい。現象的に挙げるならば、機動隊の常駐化とロッカーアウト攻撃のために、学生戦線においては、政治闘争を組織し得ず、学内諸闘争と課題別共斗を軸とした闘いに追い込まれ、また、そこでしか有効な闘いを組織し得なかつたといった時代状況が存在した。また労働戦線においても反戦から労活へのヘゲモニーの移行が示すように闘いの場は「街頭」から「職場」へと移行していく。われわれは、この期間を戦後秩序解体期における市味的統一戦線左派からプロレタリア的軸への移行期であると位置づけることができた。したがって現在、問われているのは反戦＝全共闘の地平を踏まえた上で前述した人民諸階層の自立的運動展開を、単なる階層間統一戦線として一般的に結合させることではなく、明確にプロレタリア権力機関形成への過渡として、階層運動の狭い枠組みを越えた社会的連関性を獲得し得る結合として形成しなくてはならないということにある。したがつてそれは、一般的な政治スローガンの一致による共闘でもなければ、諸党派による姿意的な結合でもない。それは明確に、それぞれの階層における運動の質とその方向性を踏まえたものとしてそれぞの運動の内的一深化をも同時に可能するものとして存在しなければならないのである。これは、現在の政治闘争が社会再編と同時にその総仕上として存在している以上、それはまさしく、権力闘争の時代における政治闘争が要求する地平であるといつてもよい。このことは、いいかえれば、学生運動なり労働運動を社会関係総体の中で明確に位置づけなおし、それらの運動を階級闘争として組織化していくことである。その意味で2／6実行委員会の提起している反帝戦略部隊の形成は、諸階層の反権力運動との共闘（＝共同闘争）を媒介としてその運動の質を学生戦線総体に還流し、狭い運動枠組を破碎するものとして定立しようとしていることは評価されねばならない。が、一方学生戦線においては70年代初頭の一時代性において発生せざるを得なかつた学内主義的傾向を帝国主義が強いる形態として対象化し得ず、単に六〇年代的に運動の再生のみに目を向けることから発生した「層としての学生運動」へと後退をとげつた部分が存在しているし、それらの傾向との階級的分岐を鮮明にせねばならないことはいうまでもない。

労働戦線においても同様なことがいえる。労働者の階級的な形での政治的登場を社民の「政党－労組」構造と二重写しして、「ゼネラル・春闘勝利」を唱え、「春闘構造」の左からの補完を行なおうとする「反民同一反既成戦線」の新らな「組合－政党」主義がそれである。反戦青年委員会が突出し形成した政治を踏まえて、労活の「職場闘争」を越えようとしている傾向があるが、それは、職場への政治の持ち込みというかつての市民的政治闘争へと転落せざるを得ないのである。

以上のことと明確なように、現在、われわれが立っている地平と出発した闘いでありながら、「労農学との共闘」を既存の「政治」を打破しつつ形成したのにひきかえ、「階層としての運動」へと自己を純化し共闘を拒否して、敗北していった「むつ小川原」の闘いとの差異をみればそれは明白である。個々の闘いを社会関係総体の中で位置付けることの重要性をこの事実はものがたっている。

ところで反戦＝全共闘運動の崩壊、いかにかえれば68～69年にかけての政治的敗北以降、労働者、学生問わずその闘いは、街頭を中心とする形態から、職場－学園における闘いへとある意味では後退を強いられ、ある意味では深化していった。これは帝国主義の支配が末端にまで及び、労働者にとつてもまた学生にとつても生活過程総体を巻きこんだものとして闘わざるを得なくなつたことの反映であり、またそれは、「市民」（個的・存在）として街頭で「労学」が共闘する戦線秩序崩壊過程における統一戦線の解体を表明していくといつたといつてよい。現象的に挙げるならば、機動隊の常駐化とロッカーアウト攻撃のために、学生戦線においては、政治闘争を組織し得ず、学内諸闘争と課題別共斗を軸とした闘いに追い込まれ、また、そこでしか有効な闘いを組織し得なかつたといった時代状況が存在した。また労働戦線においても反戦から労活へのヘゲモニーの移行が示すように闘いの場は「街頭」から「職場」へと移行していく。われわれは、この期間を戦後秩序解体期における市味的統一戦線左派からプロレタリア的軸への移行期であると位置づけることができた。したがつて現在、問われているのは反戦＝全共闘の地平を踏まえた上で前述した人民諸階層の自立的運動展開を、単なる階層間統一戦線として一般的に結合させることではなく、明確にプロレタリア権力機関形成への過渡として、階層運動の狭い枠組みを越えた社会的連関性を獲得し得る結合として形成しなくてはならないといつたといつてよい。

われわれのいう労働者の大衆組織と学生の大衆運動組織との共同の政治闘争はその結合によって相互の大衆運動組織に影響し合い大衆運動の転換を可能とするものでなければならない。

われわれは、二・六実行委と七四労働者運動実行委が実現した共同闘争の地平こそそのような方向を目指したものであると評価するに他ならず、単に「階層間の政治問題をめぐる統一戦線」として理解されなければならない。

われわれの労働者の大衆組織と学生の大衆運動組織との共同の政治闘争はその結合によって相互の大衆運動組織に影響し合い大衆運動の転換を可能とするものでなければならない。

われわれは、二・六実行委と七四労働者運動実行委が実現した共同闘争の地平こそそのような方向を目指したものであると評価するに他ならず、単に「階層間の政治問題をめぐる統一戦線」として理解されなければならない。

〔四〕

だが、この共同闘争の実現の意味とその内実は、同時に、前述の内容からも明らかのように、思想的には、反戦＝全共闘運動という「戦後秩序の崩壊－再編」に規定された運動の段階から、帝国主義の支配基軸の確定期における運動の再編をその内実としている以上、それは権力闘争の時代にふさわしいプロレタリアートの思想とその組織性によって裏付けられないなくてはならない。そしてそれは当然のことながら、戦後秩序の崩壊によつて規定され、それを促進したところの戦後社会の価値意識の崩壊感覚（かつての全共闘－反戦の闘いを支えた内的意識）、つまり、かつて、「ただのわたくし」として表現された「個的決意性」との明確な対決を抜きにしては形成できるものではない。もちろん、こうした戦後秩序意識からの離脱、およびその個人にとっての戦後意識の崩壊感覚は、大衆の真の意味での自立化の契機としては重大なことであり、本質的なことであるが、それは叛乱の原点であつても、革命の起点ではあり得ない。たしかに、69年の大衆叛乱におけるノンセクトの「ただのわたくし」としての闘いの意識は、政治的－社会的拘束性をもつた諸個人が、戦後政治－社会構造の深部における解体過程を契機として階級闘争に登場する際の自己認識としては重要であり決定的である。それ故にわれわれもそれを共有してきたが、しかし、このような社会の崩壊感覚は諸個人にとって反乱の出発点であつても、党の出発点でもなければ階級形成の出発点でもない。われわれにとつての出発点はこのような崩壊を経過した上で、再びその階級的被規定性を受けとらざるを得ない諸個人とその集団である階級である。

われわれが、党的根拠をその遊撃一号において、明確にプロレタリアートとブルジョアジーの階級対立に置いたのはこの故であり、その位相からのみ、物象化された相からの離脱過程、同じことであるが、諸個人の内的意識からいえば秩序意識の崩壊過程を対自化し得るのである。その意味でいえば、党と階級の根拠は全くの同一で

1974年12月15日発行

遊 撃

あり、マルクスが、共産党宣言で明快にのべる如く、「われわれの党はプロレタリアートの党であつて、特別な党ではない」のだ。だからわれわれは、党と労政同の関係を党と階級の関係として、その機能と性格の差として明確にしてきた（遊撃一号参照）。つまり、労政同こそ、階級形成の中核であり、様々な大衆組織のカードルとして位置づけてきたのである。したがつて、今秋期闘争で問われたのは、この労政同が戦後社会の崩壊過程で自然発生する価値意識の崩壊に裏打ちされた諸個人を如何に階級に形成するかに存在したといつてよい。それは、言葉を換えていえば、われわれが大衆組織をどのようなものとして位置づけるのかであり、また、大衆組織の内実、その団結を軸にして階級を形成することの中味であったといつてよい。もちろん、党一労政同にとつても、党一労政同がその根拠を階級に置く以上、こうした大衆組織の盟約性なり団結の様式なり、その組織性なりは、党のそれと根底的なところで同質である。それは党一労政同の豊富化・強化の問題として党主体にとつては問題にされるわけであるが、今秋期闘争の過程で主要に問われたのは大衆組織のそれであった。

しかしながら、このように問題を提示することは、価値意識の崩壊過程に裏打ちされつつも、そのことに自覚的・無自覚的とを問わず、自己を無規準なサークルとして偽示政治集団化させている諸ノンセクト集団との大衆的思想闘争を顕在化させずにはおかない。なぜなら、大衆組織に盟約性なり団結の様式なりを問うことは、「ただのわたくし」から「階級的規定性を帯びたわたくし」あるいは「たち」へのいわば否定の否定の過程であるからである。このようにのべたからといって、もちろん、われわれは反既成秩序としての「ただのわたくし」あるいは「たち」のもつ一定の革命性を否定するつもりもないし、自己のものとしてそれが「共有」されていることを否定するものでもない。ただ、ここで明らかにしておかねばならないのは、そうしたノンセクトなり、その集団がそのまでその革命性を發揮するのは、大衆闘争が高揚に向かっているときであり、その時には、それは階級と党的路線と一致するが、それ以外の条件化においては、さまざまの乱反射を個的という規定性の故に不可避とするということである。したがつて、われわれが「党一大衆構造の転質」というとき、それは、個人の秩序感覚が個別に部分的に崩壊しつつあることをメルクマールに置くことはできないし、また大衆闘争が戦後社会を越えようとするとき「党」が啓蒙主義の党として、ない。そうではなく、そうした限界を越えて新らたな「党一大衆」の関係を形成することなのだ。我々はその問題に労政同の建設と社会同の強化をとおして答えてきし答えるであろう。それは、再三再四説いているように階級闘争の「負性」に依拠し階級的に無自覚に、大衆の自然発生性に拝跪し指導を放棄することではなく、大衆組織の内部に、相互の盟約性と規律性を内実化させることこそ、労政同と同学同の任務なのである。更にいえば70年代権力闘争を担う運動組織

の建設はなにか全く新しい観点や思いつきによって獲得されるものではなく、現実の大衆そのものに立脚しつつ、その「負性」との対立・止揚を通じてのみ可能になるのである。

われわれは、今秋期闘争を通じて、そのような闘いの陣型を建設してきたし、そのような党と、階級の陣型こそが、反戦・全共闘の象徴される戦後秩序崩壊期の統一戦線を乗り越えて進むことが唯一可能な道であることを宣言するし、その道を、まっしぐらに、70年代権力闘争の道として切り開くであろう。その一步は踏み出された。

〔五〕

われわれは、そのような大衆的統一戦線を領導するものとして、労政同が存在することを鮮明にしなければならないのはいうまでもないが、しかしそのことにのみ、党と労政同の任務を溶解させるものであつてはならない。（一章で触れたように現在の階級関係が基本的に要請しているのは、権力（政治）再編と社会再編の同時的進行という事態であるからである。つまり、この段階における党と労政同は、二重任務を帯びざるを得ない。つまり権力主体として自己を形成し、なおかつ、階級形成の主体として自己をも存在させねばならないからである。

これは、現在の階級関係が、フォード来日「訪韓」・「刑法改悪」といった全人民的政治課題を一方で鮮明に押し出しつつ、一方で、インフレ・長期不況の名のもとでの経済・社会再編を強行している。職場・学園における個別叛乱の深化および、その横の結合は、こうして客観条件の下にあつては、前述のように、必然であり、そのことは、社会的連関性の拡大・強化へと発展するが、しかしまだ、そのため強固に形成されねばならないが、それのみでは、新らたなソヴェト主義の次元であり、問題とされねばならないのは様々、地区の政治的結合を政治的闘いと深化させつつ、権力闘争の問題をまさに、プロレタリアート、人民の権力問題としてあつかいそれ自身が「権力」として飛躍を賭けて闘う「党主体」の形成こそが重要なのである。また逆に、そのような「権力主体」との関連性の中においてしかしさまざまな階層の間の統一戦線の問題も、地区における政治的結合の問題も、それ自身では革命の問題には永遠につながらないし、が、フォード来日「訪韓」闘争と、インフレ不況下の労働者、学生の闘いが、真に要求するものであり、そのことを抜きに、われわれは闘いを次の地平へと押し上げていくことは不可能なのだ。

総ての労働者一人民諸君！地区の政治的結合を全国政治闘争の回路へと押しつつめよ！

創刊号 1 目次

一 プロレタリア権力闘争時代における「党」として同盟を再編強化せよ！

二 党（同盟）の綱領—組織—戦術の一翼として労働者政治同盟の建設の骨子

三 階級的労生運動の運動組織論の構築に向けて

四 レーニン組織の歴史的教訓と現代的対自化・党建設の主

体的構築にむけて

社会主義学生同盟

峨嵯 みつる

2号 目次

一 1・8 破防法、11・18 フォード訪日阻止闘争を日米アジア反革命新秩序体制粉碎闘争として闘い抜け！

二 破防法・保安処分・刑法改悪をアジア反革命新秩序の環としてとらえ、刑法改悪粉碎闘争の全人民化を獲得せよ！

三 全労活第三回集会の総括を踏え労働者政治同盟の領導の下に地区共同闘争体連合を形成せよ！

既成戦線の「争議早期解決」策動と大衆的党派闘争を展開し、支援―被支援の関係をのり越えた全面的独自潮流を形成せよ！

10.29 本山門前集会の位置と総括

東北地方の豊富な労働力を安価に使用して企業拡張を遂げてきたバルブメーカー・本山資本は七〇年、二交替制を導入せんと画策したが、「人間は昼働いて夜は寝るものだ」というスローガンのもとに五七時間のストライキによつて、これを粉碎されるやいなや、組合の中心的活動家であつた青柳氏の配転→解雇を組合御用派と一緒につて強行してきた。

これに対し「守る会」を七名で結成し、反撃を実施し、定期大会においては、御用組合幹部を追放し、闘う執行部を確立するに至つたのである。ここで組合丸抱えでの御用化に失敗した本山資本は職制中心に第二組合を結成し、公然たる労働者弾圧に乗り出すのである。

このような活動家解雇や組合分裂は今日では資本の常套手段となつてゐるものであるが、この攻撃に対して「闘いこそが労働者を変革し、組織を維持し、強化する」との原則を堅持し、職場実力闘争を圧倒的に高揚させていくのがその反撃である。

この間のことを支部バンフは次のように述べている。「職場闘争は、全組合員によつて闘われ、職制機構を末端からゆりうごかすことによつて一種の解放区が生まれ、資本に大きな打撃を与えるとともに、労働者に職場の主人公は俺達だという自覚と確信を与えることによつて、本山闘争のその後の發展の原動力となつた。一人一人の自らの闘いこそが労働者を鍛え、変革し、組織を強化することになるのだ。」

このような職場闘争の高揚に恐怖した資本は特防（ガードマン）導入→ロックアウトといふ強権的弾圧をかけてくるのであるが、この弾圧の質は「細川鉄工」、「教育社」等にもみられるように、戦闘的労組に対する弾圧形態として数多くみられるよう

になつたものであるが、それこそ噴出する労働者の闘いによつて追いつめられた資本のあがきの表現であると同時に、戦後多く策したが、「人間は昼働いて夜は寝るものだ」というスローガンのもとに五七時間のストライキによつて、これを粉碎されるやいなや、組合の中心的活動家であつた青柳氏の配転→解雇を組合御用派と一緒につて強行してきた。

これに対し「守る会」を七名で結成し、反撃を実施し、定期大会においては、御用組合幹部を追放し、闘う執行部を確立するに至つたのである。ここで組合丸抱えでの御用化に失敗した本山資本は職制中心に第二組合を結成し、公然たる労働者弾圧に乗り出すのである。

このような活動家解雇や組合分裂は今日では資本の常套手段となつてゐるものであるが、この攻撃に対して「闘いこそが労働者を変革し、組織を維持し、強化する」との原則を堅持し、職場実力闘争を圧倒的に高揚させていくのがその反撃である。

この間のことを支部バンフは次のように述べている。「職場闘争は、全組合員によつて闘われ、職制機構を末端からゆりうごかすことによつて一種の解放区が生まれ、資本に大きな打撃を与えるとともに、労働者に職場の主人公は俺達だという自覚と確信を与えることによつて、本山闘争のその後の發展の原動力となつた。一人一人の自らの闘いこそが労働者を鍛え、変革し、組織を強化することになるのだ。」

このような職場闘争の高揚に恐怖した資本は特防（ガードマン）導入→ロックアウトといふ強権的弾圧をかけてくるのであるが、この弾圧の質は「細川鉄工」、「教育社」等にもみられるように、戦闘的労組に対する弾圧形態として数多くみられるよう

になっている。ここにおいて重要なことは、第二組合を解体の対象として位置づけ、実力闘争の展開をもつて勝利をかちとることを、すなわち二組の存在そのものを許さない闘いとして自己を純化していくものとしてあるのだ。ここにおいて重要なことは、第二組合幹部依存→幹部による代行主義といふ構造を打ち破り、組合員一人一人の主体的闘争を基礎とした団結を生み出するのである。

その意味で、10.29門前集会は、別棟就労裁判の結果がどうあれ、原職場を実力で奪還し、第二組合の解体なくして本山闘争の勝利はありえない。この立場に立つ本山支部と支援連帯委にとって、既成戦線指導部の路線対決の場としてあつたのである。この実力闘争は不可欠のものとしてあるといふことである。この実力闘争こそは労働者との闘いを從来の既成労働運動における組合幹部依存→幹部による代行主義といふ構造を打ち破り、組合員一人一人の主体的闘争を基礎とした団結を生み出するのである。

この意味で、10.29門前集会は、別棟就労裁判の結果がどうあれ、原職場を実力で奪還し、第二組合の解体なくして本山闘争の勝利はありえない。この立場に立つ本山支部と支援連帯委にとって、既成戦線指導部の路線対決の場としてあつたのである。この実力闘争は不可欠のものとしてあるといふことである。この実力闘争こそは労働者との闘いを從来の既成労働運動における組合幹部依存→幹部による代行主義といふ構造を打ち破り、組合員一人一人の主体的闘争を基礎とした団結を生み出するのである。

この意味で、10.29門前集会は、別棟就労裁判の結果がどうあれ、原職場を実力で奪還し、第二組合の解体なくして本山闘争の勝利はありえない。この立場に立つ本山支部と支援連帯委にとって、既成戦線指導部の路線対決の場としてあつたのである。この実力闘争は不可欠のものとしてあるといふことである。この実力闘争こそは労働者との闘いを從来の既成労働運動における組合幹部依存→幹部による代行主義といふ構造を打ち破り、組合員一人一人の主体的闘争を基礎とした団結を生み出するのである。

1974年12月15日発行

反弾圧闘争を権力闘争の陣型構築へ!!

破防法一刑法改悪一保安処分粉碎の大衆的権力闘争を担う階級戦線へと再生せよ

11月8日、「破防法と闘う会」結成集会が南部労政会館に於いて約三百名を結集して開催された。集会では69年～71年に至る集中的な破防法弾圧を70年代権力闘争にとっての試練として受け継ぐ革命派の結集が強く呼びかけられた。又、破防法弾圧を中心とする刑法改悪粉碎のため全人民的な戦線構築が課題とされたのである。70年代が帝国主義世界支配の再編を基軸に革命と反革命の激動の時代として登場しつつある今日、この激動の先駆けというべき69年～71年の闘争に対する集中弾圧を更に徹底させ、革命の圧殺のための権力の企図たる刑法改悪一予防反革命体制の形成を粉碎することは、70年代を真に権力闘争の時代に転化せんとする革命派の主要な任務となつている。

既に帝国主義の革命派に対する弾圧に抗して多くの反撃が開始されており、これが権力闘争の据野として、強く打ち固められようとしている。「破防法と闘う会」の活動が如何なる役割を果すのかは極めて重大であるといわなければならない。

集会に至る経過報告に語られた、長い時間と種々の曲折を経て「破防と闘う会」が準備されてきたことは、反弾圧の闘争が転回点に立っていることの表現でもある。

11月8日、「破防法と闘う会」結成集会が南部労政会館に於いて約三百名を結集して開催された。集会では69年～71年に至る集中的な破防法弾圧を70年代権力闘争にとっての試練として受け継ぐ革命派の結集が強く呼びかけられた。又、破防法弾圧を中心とする刑法改悪粉碎のため全人民的な戦線構築が課題とされたのである。70年代が帝国主義世界支配の再編を基軸に革命と反革命の激動の時代として登場しつつある今日、この激動の先駆けというべき69年～71年の闘争に対する集中弾圧を更に徹底させ、革命の圧殺のための権力の企図たる刑法改悪一予防反革命体制の形成を粉碎すること

は、70年代を真に権力闘争の時代に転化せんとする革命派の主要な任務となつている。

既に帝国主義の革命派に対する弾圧に抗して多くの反撃が開始されており、これが権力闘争の据野として、強く打ち固められようとしている。「破防法と闘う会」の活動が如何なる役割を果すのかは極めて重大であるといわなければならない。

「革命的左翼」と自称する諸君の中にも、この間の展開の「戦闘化」賛美、それへの迎合と屈伏を開始している部分がある。彼

かえるならば、支援と被支援という関係を「お手伝い」というレベルにとどめるのではなく、相互の闘争体の結合として追求することにより、全国的にも、既成戦線路線に対決し、それとは区別された独自な潮流の形成へと向かわねばならない。そして、このような独自潮流の形成こそが、民間労働運動内部に亀裂を生じさせ、その解体を可能にする道でもあるのだ。

「革命的左翼」と自称する諸君の中にも、この間の展開の「戦闘化」賛美、それへの迎合と屈伏を開始している部分がある。彼

らは我々が「民間労働を解体せよ」などと言おうものなら、血相をかえて、「小ブル急進主義」であるとか「既成潮流下の大衆獲得」を放棄するものであるかのことく吹いて廻るだろう。しかし、その思考パターンそのものが逆転していることに彼らは気づいていないのだ。すなわち、既成潮流下の大衆獲得は、それへの迎合ではなく、既成戦線を批判しきる独自の主体を形成することなくしては不可能であることが、彼らには理解できないのだ。

このことは、今更言うまでもないことだが、七四年春闘過程において、彼らが「春

が、救援連絡センターは「闘う会」が反弾圧戦線の分散化状況の克服を掲げていることを高く評価し、権力の介入を一方で容易ならしめる主体的弱点の止揚は諸活動家、闘争体の真しな努力なくしてなしとげられないことをえた。

「破防法と闘う会」が「破防法の粉碎を目指す」ことに運動上の主眼点を置くに至った経過はこの転回点における一つの方向性の提起としての出発を求めたのであろう。破防法攻撃との対決と運動の前進を強く確認する結成集会は数十名の私服刑事と機動隊が包囲する中で行なわれた。警察の妨害はこれのみにとどまらず、強に弾圧網が布かれることによって集会における講演を断念せざるを得なかつた闘争者があつたことが報告され、「闘う会」発足への権力の強い警戒がバクロされた。集会はこの警察の介入を厳しく弾劾し「闘う会」強化に集中して討論が展開されたのである。

「破防法裁判闘争を支える会」は猪之川世話人が自作の詩を読み上げ、破防法弾圧を行なう権力を厳しく弾劾し、闘いへの強い決意を表現して参加者に深い感銘を与えた。被告のアッピールでは松尾被告、本田被告を明らかにした。

闘勝利、ゼネスト貫徹」を金科玉条の如く繰り返し、結果として民間労働運動との分岐を形成するどころか、逆に積極的に民間左派へと転落してしまつたという事実の中で明らかである。その意味では、来る年の七五春闘が、統一地方選における議会主義的収約として意図されていることに対して、どのように階級的分岐を形成し得るのかが問われるものとしてあるし、そのことを本山闘争の到達地平を踏まえて、各地の支援連帯委活動の展開として具体化せねばならない。

告が破防法裁判闘争に対する革マル派の解体攻撃によって自身出席できないことが表明されたが、このような反革命的策動を粉砕して闘い抜くことが伝えられた。更に四年余に及ぶ超長期拘留の弾圧でなお獄中にある塩見被告は破防法のもつ思想解体、革命組織解体の本質がこの塩見被告への弾圧にあらわれているとし、塩見被告の保釈をからむる闘いへの支援を訴えた。久保井被告は69年～71年にかけて革共同・共産同への破防法攻撃が、組織破壊を含む革命運動の解体をもくろんで行なわれたものであることを明らかにし、破防法攻撃との闘いを革命努力の結集によって発展させるべきことを訴えた。

全都労働組合活動家会議代表は、労働運動への弾圧は刑法改悪の先取りとして既に進行している実態を報告し、これが破防法攻撃によって可能となつているとし、一九五二年の破防法成立に反対した既成戦線が現実の先取り弾圧に一切対応しえないことを厳しく批判して、主体的戦線の構築に全力を傾注する決意が示された。闘争組織が破防法粉碎一刑法改悪阻止の闘争を主体的闘争強化として結集させねばならないこと

庄司宏大菩薩破防法裁判闘争主任弁護人は裁判闘争の経過を報告し、破防法の反革命立法としての性格をバクロする長期にわたる闘いに広い支援を訴えた。浅田光輝世話人は、破防法攻撃との闘いが現在種々の妨害によって重大な岐路にあることを明らかにし、こうした妨害活動は広範な勢力の結集と闘いの強化によって打破されると強く表明した。

最後に超長期拘留の弾圧のもとにある塙見被告の保釈を得るため署名とカンパの運動を開く決議を参加者全員の拍手で確認して集会を終えた。

「破防法と闘う会」結成大会によせられた闘いへの決意はなおその方向性をめぐつて種々の試行を経て具体化されなければならぬ現在の権力との闘争における状勢の基本を明らかにして広く共有の認識を獲得することが必要である。

排外主義の育成と 権力支配強化

帝国主義の世界的支配再編の急激な進行の中での自民党政治に対する批判の高揚が、保守一革新団式による種々の連合政権構想として帝国主義の延命策を補完する作業が開始され、それら全てが革命派の圧殺に共同していることに現在の支配再編の進行が見てとれるのである。所謂野党の政権構想が、インフレー強蓄奪一産業構造再編の過程での社会的不平等の増大、差別、分断支配の強化という現実の中で、大多数の人民の不満の代弁者として振舞うことによって、人民の闘いを圧殺し、新たな資本蓄積構造の形成に寄与していることは明らかである。アジア反革命再編の要としてのフォード来日、訪韓に実質的には反対せず、田中退陣の「政局危機」に目を奪われ、アジア人民に対する反革命的介入を阻止する政治行動を抑止していく既成勢力の姿勢こそ帝国主義の求める「政権担当能力」をもつた政党としての成長の姿であったのである。

われわれは、この間、同盟の総力を挙げて、党建設と革命的陣型の構築に向けて闘つてゐない。いまでも財政は党の基礎でありこの活動を抜きにして党を語ることはできない。われわれは、ここに同盟員諸氏に年末一時金の一割カンパを呼びかけるとともに革命的同志諸君にも、党へのカンパをお願いしたい。

年末一時金カンパの要請!!

全同盟員諸君および革命的同志諸君

わが同盟が、旧再建準備委員会の腐敗せる諸君を追放し、革命的政治的・実践的指導部として自己を確立して以来すでに半年の歳月を経過した。

われわれは、この間、同盟の総力を挙げて、党建設と革命的陣型の構築に向けて闘つてゐない。いまでも財政は党の基礎でありこの活動を抜きにして党を語ることはできない。われわれは、ここに同盟員諸氏に年末一時金の一割カンパを呼びかけるとともに革命的同志諸君にも、党へのカンパをお願いしたい。

成過程は、革命勢力圧殺を同時的に進行させてきた。爆弾闘争に対する犯人デッヂあがいう卑劣な工作を生みだしたに止まらず、全社会的な監視網形成へのキャンペーンが執拗に続けられている。これら旧来の法体系の拡大適用、逸脱を伴う弾圧体制の合法化、革命派の抹殺として刑法改悪が企図されていることをみなければならない。

一方では反社会的民主政治、憲法に基づく人権の擁護を語り、他方では権力支配に実力で対決する人民の決起を圧殺する、これがこそが「憲法に保障された」個人の民主的権利の回復とは資本の屈伏を人民に強制する物であることを表わすものであり、分断された諸個人への義務の押しつけを結果とするものである。現在の排外主義の形成が分断された諸個人を国家利益の枠へ包摂せんとするものである時、ブルジョア的個人主義を政治基盤として強化しようとすることは帝国主義の支配再編を強力に補完するものとなる。

現在の革命派に対する弾圧強化は全人民への国家的監視体制の形成によって始めて実現されているのであり、権力弾圧の粉碎は70年代を権力闘争の時代へ転化する革命闘争の発展によってのみ可能となることである。

大衆的実力闘争の 徹底化と権力闘争

革命思想の解体、革命組織の破壊を目的とする破防法弾圧は、大衆闘争と革命派の分断を70年代初頭において貫徹してきたといえるだろう。帝国主義がこの教訓を更に社会生活全般に亘る規範として革命派の圧殺を企図する時、これを打破する戦線構築が早急の課題である。我々も又、権力による弾圧の教訓を革命闘争形成の中に実体化させなければならない。

この闘いに対しても、大衆を隠れみのとすること、大衆運動と称してその実、政治内実をひき下げるによって弾圧を避け、大衆を結集できるとする動きが既に発生している。革命闘争は政治が大衆の中に埋没

することによって発展するものではなく、革命的政治が、大衆闘争を権力闘争の戦略的基礎として強化するのであり、権力の闘争分断を粉碎して革命的政治行動を可能とするのである。70年代における革命的運動にとつては、武装闘争と大衆闘争の分断を止揚し、一体的な権力闘争の陣型構築、闘争展開の実現を獲得することが任務とされなければならない。職場、地域の個別課題をめぐって広範に生起している実力闘争は、権力闘争形成へ向けての政治結合を媒介に戰略的な展開が求められており、これらの闘争が自然発生性の延長におし止められることなく、革命的政治行動との同質的な団結を形成していくことが必要である。

このような結合が求められていることは、帝国主義の矛盾の深化に対して決起する種々な人民の闘争を正しく、実力闘争の展開と革命派への結集として導くことができず、社共の妥協的介入によって闘争を圧殺される現在の事態を早急に克服しなければならないことにもよる。権力弾圧を粉碎していくことは、弾圧に対する救援活動が補助的な構造の中で排外主義を生み出しつつ革命派の包囲として進行するのに対し、権力に対する反弾圧の闘争は、明確に権力闘争のための全人民的な結合を発展させるものでなければならぬ。革命的な政治を大衆的実力闘争の発展によって防衛し、深化し、結合を強固にしていくことが問われている。

権力による弾圧は直接的な弾圧対象のみを目標とするものではないことはいうまでもないが、だとするならば、現在の権力との闘争の構造が持つ、結合の政治的弱さ、分散的闘争の展開が大衆闘争と武装闘争の分断の止揚を課題とすることこそ、全ての党派、闘争組織、運動体に求められている。

ブルジョア政治への屈服への道「遠方への」旅立ちを祝して——『遠方から批判』

山下 誠

游 撃

1974年12月15日発行

松本礼二責任編集なる『同人誌』『遠方から』が、市場に流布されている。いうまでもなく、松本礼二氏は旧同盟再建準備委員会の議長であり、この『同人誌』に名を連ねている正木・咲谷・火野の各人は旧同盟の政治局員であった。かつて、発刊された『遠くまでいくのだ』が中核派から離れていた人を中心に編集されたが、この「遠方から」は、わが同盟に敵対し脱落して行った人々かつての『指導者』であることを特徴としている。

「われわれはこの雑誌を闘いの『現場』からでなく、闘いから『遠くへだたった場所』から送る。いらだたしさと、悔しさと、そして、ここからしか本質に迫る語りかけはないという自信をこめて。多くの新旧左翼の諸君は、闘いのまゝ唯中に居ると信じ、あるいは信じようとしている。このことの虚妄はやがて事実によって、否応なく知らされることが確実である。」

正木真一は編集後記でこのように語る。

われわれは、まず、このような語り口しか持ちえない、否、このような語り口をすれば人が感激すると思っていて彼らと共に同じ同盟にあつたことを深く恥じることを公言するところからはじめなくてはならない。ところで、「闘いの『現場』」とか「遠くへだたった場所」とかという言葉を彼は無規定に投げかけるが、一体どこが、「遠くへだたった場所」で、どこが「現場」であるというのだろうか。

かれわれは、この言葉をつかったとき、それは空間的にも時間的にもそして、その空間をとりまく思想的・実践的空気においてもそれは、はつきりしていた。ところで、正木氏の場合それはどういふことを意味しているのだろうか。「ここからしか本質に迫る語りかけはないという自信」をもっているというのだから、おそらく「遠くへだたった場所」とは本質的な闘いが存在している位相といふことにでもなるのだろう。と、すると、そこにいる「いらだたしさ」とか「悔しさ」とはどういうことになるのだろうか。そして、われわれは、次々と疑問を発せざるを得ない、「遠方から」第一巻第一号が十一月一日をもって創刊され、その創刊号の後記が、この文章でもってはじまるのであるから、この「遠方から」を始める以前は、君たちは、「闘いの現場」にいたのか、それとも「遠方に」いたのか？ それ以前も「遠方」にいたのだと改めて「遠方に」いるぞと今さらといわなければならないのはなぜなのか。

わたくしが、このように、「遠方」と「現場」の意味を問い合わせるのは、別に正木氏にからんでいるのではない。問題にしたいのは、同盟とか党とかの「政治」にたずさわっていたものが、なんらかの事情で、そこから離れたときに必ず、このような「語り口」しか持てない（彼らの場合はそれは演出であるが）のは、一体どうしたことなのかを問いたいがためなのである。ここに、われわれは、党を通じて階級の形成を押し進め自からも独自な闘いを行う存在であ

一大衆、近代一土着、闘争一生活等々の二分法、つまりは、近代主義そのものをみないわけにはいかない。「現場」の中に「遠方」を発見することこそ、また、「遠方」を「現場」として闘うことこそ、七〇年代が要求している地平であることを彼は、末だ、理解できていないのだろうか。

この二分法は、「遠方から」同人に共通する思考法である。

「常東で△死民△にされ、鹿島で踏み散らされ、高浜入で又も△部隊△とされている農民の急持になつてみるとよい。私は山口氏をとるより、その農民をとる。」（火野本人）

実際にカッコの良いぜりふであるが、このように言うことは、何時でも正しく、いつでも間違っている。われわれが問題にせねばならないのは、このフレーズの如く、山口氏が、農民を△部隊△にしたことが眞実だとしても、△部隊とされた農民△と△山口氏△の間に存在する共通の何にかがあった筈だしそれを見つけ出すことの方が重大なのだとだけいっておこう。ところが、『遠方から』山口批判論文ではその努力は、全く払われない。そして結果的に「だからと」いつて、私は、あるがままの民衆を許すわけではない。なぜならば、民衆自身が、「山口神話」を生み出す風土をつくってきたのだから」と述べることによって、民衆と山口を共に断罪することによって終わる。

ここにあるのは、簡単に云つてしまえば、『絶体に世に受けられることのない遠方による党』が、大衆を次々と敗北するということがわかっている闘いへ戦術と技術を媒介として駆り立て「階級形成」「大衆政治同盟を大衆に結成させ一革命をやらせ、その最終的成果を党が奪うといふあの長崎私党論のバリエーションである。

游撃創刊号における中常論文は次のように述べている。「長崎のようすに、党を「私的な党」としてとらえ、大衆をその階級的基礎とは無関係に大衆叛乱としてとらえ、この「私的な党」と「大衆叛乱」が権力を奪取したときのみプロレタリア革命になり、党も「私的なものから「公的」なものになるという図式は、大衆叛乱と党の關係を党と大衆の内的連関性を絶つた」技術を媒介とする主客図式

る以外にはあり得ない。したがって、現在、要求されているのは「遠方から」がいうように「少数の心ある人々に対してもだけは、わかれわれの真意を伝えておきたい」という私的な意図」では、だめであり、そのようなサークル根性こそ、批判し、紛糾されねばならないのだ。だが、革命とマルクス主義をブルジョア思想でしか理解しえぬ彼らは、党主体をブルジョア的なもの私的なものとしてしか理解できず、彼らの見せかけの発言さえ正しければ、(彼らの語り口のいやらしさをみよ!) 現場で闘っている「少数の心ある人々」は理解し、その方針に従うにちがいないといったとてつもない思い上がりに陥入ってしまった。

そして、更に、仕事の悪いことに、そうしたブルジョア思想に裏付けられて、勝手に、「党组织内部においては革命とか大衆の名によつて合理化されるものはない」(長崎私党論)などと言い出し、そうした私的サークルの存続のための階級的裏切りを今や公然と開始しているということである。彼らとわれわれとの革命的党派闘争の契機となつたのは、彼らが自から居直つて「遠方から」に「公表」した「山口武秀神話と常東流軍学」なる住友資本と岩上県知事にこびを売るための論文であった。この論文をことともあろうに共産主義者同盟の名において『情況』に発表することを主張し、(『情況』編集部には断われたらしいが)彼らは、高浜入闘争を敗北させ、岩上知事の延命と鹿島コンビナート反対闘争に敵対せんとしたのである。このことはなによりもよく、彼らが「山口批判論文」と呼んでいるこの論文の到るところで示されている。つまり、高浜入闘争は、最初から勝利していた闘争であることを彼らはブルジョアジーの内部対立のみに依拠して説くのであるが、なに故に、彼らは、ここまで、ブルジョア内の対立にのみ目を奪われているのだろうか? 「情報」はどこから出たのだろうか? このように問い合わせれば問題は鮮明になる。

そして、この疑問に対して、われわれは、このように答えることができる。旧再建準備委員会の政治局において、「東風社」を手段とする党建設計画が語られ、その財源を独占資本のための中国貿易の情報機関の建設に求めようといふのがわしい動きが存在したという事実である。われわれと彼らの党内闘争の端緒はすでにこのとき内在しており、「遠方より」一派はブルジョアブローカー稼業への転身のために、もっともらしくこの時期に私党論を発表し、再建準備委員会をブルジョア思想で毒し、ブルジョアジーとの取引に身をゆだねる思想的・体制的整備を「党の骨格の形成」と称して進行させようとしたのである。

更に事実を挙げよう。雑誌『東風』は本年二月号において、再建準備委員会政治局の篠田某(火野本人)の指揮の下に茨城県当局との交流を深め、住友資本からの資金援助の拡大を求めたのである。(雑誌『東風』の主たるスポンサーは住友であった東風のバツクナンバーを見よ!)。

ところで、われわれは、この事実を撃墜一号においては次のようにだけ述べておいた。「より具体的に言えば高浜入問題において鹿島コンビナートと取り引きすることを通して、党の財政的基礎を確立しようといふ一派に対する我々の党派闘争として展開され……腐敗分子に対する原則の対置として展開された」と。

このように、ことを一号においては抽象的に語ったのは、こうしたブルジョアジーへの身売りを意識的に推進した張本人篠田某を除く、「遠方から」一派の他の人々が自からのブルジョア思想を総括し、階級闘争の大道へ復帰する道を残しておいたからに他ならない。だが、しかし、彼らは正しい道を選ぶことを拒否し、そのことに

居直り真っしぐらにブルジョアジーとの野合の道を進んでいることが「遠方より」の創刊と東風一二月号への「遠方」派の全面的登場によつて明らかになった。あまつさえ、自己が、ブルジョアジーと取引をしようとしたことを棚に上げ、松本礼二是『その「恍惚の死」を深く確認する』なる報告を『東風』十二月号紙上において発表し次のように認めている。『「恍惚の死」とは松本氏のことであろうか?』。

「つまり具体的には常東農民運動は現在どこで生かされているか、あるいはブルジョア自民党政治のなかに生かされているのではないが、また「高浜入闘争」はなにを帰結したのか、つまり用水問題をめぐつてどこに一番プラスしたのかといふ問題としてでたわけです。…演出家の山口はご本人の意図とは無関係にどこかのスポンサーに動かさざるを得ない。」

われわれは彼らのような破廉恥漢をみたことがない。自分のしようとしたことを持て他人の責任に転嫁するこの厚かましさ! そして、その彼がいけしゃあしゃあと、新左翼總体を「芸能界」よばわりし、さも思想的内容があるかのようにあるまい、「今日におけるこの問題は、分裂という次元のものではない(正しい!)君たちの共産主義者同體からの追放だ!」といふことが共通(誰と誰の?)理解になつたのです。…したがつて除名の問題は、自らが責任をとることによって革命派たらしめるのかどうか腹をきめてくれということになつたのです。(どこで? だれが?)たぶん近いうちに発表されるとと思うのが、はつきり言えば『除名』といふ形態をわれわれは無視したということです! などといふ『除名』の公表を恐れ、その先手を打つつもりでいる発言を聞くと、松本礼二の言葉を返せば、「数年にわたる教育がこのような諸君を育ててしまつた不明を恥じ」(遠方から)となるといふものである。

松本礼二よ、もういいかげんに、カツコ良く発言しようとする君のクセを辞めらう。そして、新左翼の代表者をしてメシを喰つて歩く歌手稼業を清算し、篠田の仲間である香山や森田のように、篠田とともに自民党にでも入党したらどうだろう。われわれはそれをアナタのアジテーションに感激し鬨いたおれたブンドの若き戦士を代表しておすすめしたい。

われわれは「遠くまでいくのだ」式の語り口の中にひそむ「遠くまでいくのだ」と似て非なるエセ思想性と偽偽性の本質を、明確にしてきた。次回は、それが、彼らのエセ思想風な論文にどうあらわれているかみることにしよう。